

## 次回企画展予告

### 第13回企画展

### 特別企画展 「新石器から清時代まで 中国陶磁展」

会期：昭和61年10月21日(水)～11月23日(日)

会場：当館第4、5、6展示室、及び企画展示室

#### ■特別企画展——中国陶磁展

館蔵品の「旧安宅コレクション」は、一人の目を通じて収集されたもので、当然そこには、その人の作品への視点、嗜好といったものが反映され、全体としてのまとまりからそこに思想・哲学を感じられる。同コレクションの特色の一つに、収集範囲の限定（漢から明時代）が挙げられる。しかし、特色はしばしば負の要素にもなる。このコレクションも私的な立場のコレクションであれば、収集範囲の限定も許されるであろうが、公立の美術館ともなれば、やはり通史的に展開されている方が望ましいと思う。

今展では、新石器時代から清時代に至る作品の展示ゆえに、館蔵品の展示の欠落部分を補い、魅力ある作品で中国陶磁史が展望出来るものと確信している。代表的な作品としては、新石器・彩陶渦文壺、漢・灰陶加彩雲氣文壺、唐・三彩馬、元・青花蓮池魚藻文壺、明・五彩魚藻文壺、清・粉彩百鹿文壺等々数多く挙げることが出来る。

同展は、80点を第4、5、6展示室と企画展示室を使い一堂に展示する。作品は、全て大阪のコレクターのご好意により拝借し、展示するものです。（K）



灰陶加彩雲氣文壺（漢）



灰陶加彩武人（北朝）



青花蓮池魚藻文壺（元）

### お知らせ

第5回講演会を下記の如く開催致します。

日 時：昭和61年11月8日(土)

午後2時～午後4時

(受付は午後1時より開始します)

場 所：中之島中央公会堂3階中集会室

講 師：和泉市久保惣記念美術館副館長

中野 徹氏

演 題：「中国陶磁と金属器—器形と装飾」

※講演会の受付で会員証を提示していただきますので、会員証をお忘れなく御持参下さい。なお、講演会当日に継続の申込みをされる方は美術館受付でお申下さい。

### 談話室

★当美術館では海外からの来館者も多数お迎えしていますが、時折、こちらが驚くほど東洋陶磁に関して造詣が深く、並々ならぬ关心をお持ちの方にお目にかかることがあります。先日、取材で訪れたアメリカ人の若い女性ジャーナリストがまさにそうでした。彼女は文学博士の称号をもち、染色研究家でもあります。色白の小柄な体に藍染のかすりをさりげなく着こなし、日本語も実に流暢でした。一般的に西洋の方は、中国陶磁の厳しく端正で完成された美を好む傾向がありますが、彼女はむしろ朝鮮陶磁のもつ「優しさ」に心魅かれるそうで「青花草花文面取壺」や「青花窓絵草花文面取壺」の秋草手の楚々とした美しさが、彼女の豊かな感性を深く刺激し、静かな感動を呼びおこしたようでした。

★展示室を彼女と一緒に見廻りして、「美しいものを見て美しいと感じる」というその実に素直な心に美術鑑賞の原点を改めて教えられた気が致しました。

(O)

### 編集後記

友の会担当者が代りました。新事務局員（小山和子）も前任者（吉村智恵子）同様、よろしくお願い致します。会の発足当初より御入会いただいた皆様も大半の方が継続手続をして下さり、会も充実した発展を続けることと志願します。長くて短かい一年半、ありがとうございました。（Y）

1986年9月10日発行(年4回)Vol.2-2(通巻5号)

## 大阪市立東洋陶磁美術館

# 友の会通信

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

### 美術館の舞台裏(2)

当館のユニークな設備の一つに、自然採光展示ケースがあります。美術品の展示には照明が大きな役割を果しますが、光源に自然光を用いる方法それ自体は珍しいものではなく、古い博物館ではほとんど採用しています。しかし従来の自然光利用には一つの弊がありましたが、それは自然光を展示室の全体に取り入れて、その明るさで物を見せるということです。そのため天井や壁の上方に大きな採光窓を設けていますが、大きな絵画や彫刻を展示する場合には有効な方法です。しかしケースの中に物を入れて展示する場合、ケースの中が最も光が届き難く、条件が悪くなってしまいます。当館では従来の発想を逆転させました。すなわち部屋は暗くして、展示ケースの上をぶら抜いてそこへ自然光を取り入れようという考え方です。さまざまな実験を長期にわたってくり返し、漸く一つの方法に到達しました。光ダクト方式がそれです。つまりケースの上に光の煙突を作るのです。煙突の内壁には光の反射効率を高めるため、0.7ミリという薄いガラスを使った特殊反射鏡を貼り廻らせました。ケースに使うガラスも、眼鏡レンズを作るための白板ガラスという特殊な青味のないガラスを使用しています。ケースの中の展示としては、ほぼ理想的な条件を作り上げることに成功したといえましょう。こうした中で四季それぞれ、朝日夕、晴れ曇り雨など、自然のうつろいの中で陶磁器が鑑賞できるのです。暗くなると自動的に人工照明に切りかわります。自然光と人工照明が混じり合うことはありません。これも自然光を重視した結果です。晴れた日の朝、透明感に満ちたケースの中で見る青磁の色の味わいは格別です。初めて見た方には驚きを、何度も見る方には尽きない興味を引き起すことでしょう。

大阪市立東洋陶磁美術館  
館長 伊藤郁太郎

## ◆第4回講演会要旨◆

# 「京焼の歴史について」

日時：昭和61年7月5日(土)午後2時～4時

会場：中之島中央公会堂

講師：京都国立博物館 学芸課工芸室長 河原正彦氏

京都で生れ育った焼きものということでお話をさせていただきます。先ず京都で焼きものが始まったのはいつかという問題、第2にそれがどういう形で展開をしていったかという問題。3番目に、京都の焼きものを現在「京焼」、「清水焼」というような言い方で併称してあります。それらがどういう形で生れ育つといったのか。人気く3つの部分に焦点を合せてお話をしようと思います。

最初の京都の焼きものがいつ生れたかということに関しては、だんだんとそのスタートの時点が古くなっています。昔は寛永(1624~1643)の初め頃に、三文字屋九右衛門という人が三条の栗田口へやつて始めたのがスタートだとと言われてあります。次に博多の豪商で、あ茶人の神谷宗忍の茶会記「神谷宗忍日記」の中に、京焼という言葉が初めて出てまいります。これが慶長10年(1605)。更にまた近年、有田関係の記録を調べていますと、親尾達の洋主・鍋尻勝茂が大阪在住の折、国許へ出た手紙がみつかりました。その中に、三条会焼候者が肥前へ罷り下つて、そこで焼きものを作って持ち上つてくる。つまり京都の三条の焼きものの職人が、唐津系の技法を中心とするものだと考えられます。とにかく肥前へ行つて焼きものを作り、それを京へ持ち上つて販売している。それを大阪にいる勝茂が実見し、「大変けしからんことなので国許ではそれをやめさせなければならぬ」といった内容の手紙が出てまいりました。この手紙には何年何月という明確な年号が無いわけですが、その中に黒田如水、或は古田織部といつた人の名前が出てまいります。黒田如水が亡くなりますが慶長9年(1604)でございますので、それより遡る時期に、三条で今焼が行われていたということになります。今焼とは、現代作りの焼きものでもいう意味力だと思いますが、三条でとにかく焼きものを作っている人たちの存在が明確になってまいります。勿論それ以前の京都市にも様々な生活の器としての焼きものがあつたわけですが、いわゆる高火度焼成による本格的な焼きものは、慶長の初めぐらいから始まっているのではないかと思うわけです。ですから今日お話する京焼は、だいたい慶長(1596~1614)の初めぐらいから、以降のものだとお考えいただければ良いかと思います。

ひとつお断りしておかなくてはならないのは、京焼と呼ばれるもののに、いわゆる楽焼碗がありますが、樂焼碗に関しては色々な見解があります。碑文に一番大きな範囲で京都の焼きものを捉えた時には、京焼の中に入れて語られることもあります。しかしこれはひとつの家職としての性格がたいへん強いので、狭義、つまり少し絞った形で京焼を譲る時には、一応外しておいた方が便利だと思います。

何故京都に、桃山時代の終りにこういった焼きものが起るのかということについては、この時代の色々な文献・茶会記・日記等を読んでいますと、記録の上に出てまいります。これは、当時盛んになってまいりました茶の湯の興隆・流行と関係があります。この時代は、茶の方でもまだ

千家を中心とするような家元制が確立している時期ではございません。様々な茶入が、様々な自分の試みの中で茶を行つてはいるという時代ですから、そういう意味で自分の好みの作品を作つてみたい、手に入れてみたい、そういう焼きものをかなり距離的にも近い所で供給してくれる場というものを設定しようという動き。それと結び付いて京都の二条東山、今ので木テルから粟田口神社にかけての地域や、更に青蓮院門跡の地域に及び、そこに瀬戸風の登窯が築かれて焼きものが始められたんだという風に考えてみています。

特にこの初期の焼きものに関しては、先程言いました「神谷宗忍日記」の中に茶碗、或いは茶入という形で出てまいります。その後、慶長・元和・寛永期に入りますと金閣寺の住職で鳳林承章和尚という方が残された日記「隔年記」がありますが、その中に、京焼の初期の動きのわかる部分が沢山出てまいります。最も多いのは茶入で、それも唐物写しの茶入とか、瀬戸入の写しといったものが盛んに出てくる。茶碗では高麗茶碗ですが、高麗茶碗も極く大きっぽい付物と寂物というグループに分れます。付物というのは元重・天正の頃に盛んに使われた井戸茶碗、或いは三島・熊川、ととやといった、一手古い時代のもの。京焼で作られるのは主としてそういうものではなく、その後に盛んに用いられた寂物のグループ、即ち御本や伊豫保、具器といったものです。それらが盛んに京都で作られ、流布していくことがこの記録の中から見れるわけです。従つて、京都で最初に作られたのは茶道具類で、茶入や茶碗等ということになり、茶碗も高麗などの寂物が盛んに作られていたということがわかつてまいります。

しかし、記録の上ではそういう形で押さえられる訳ですが、作られた現物というのは大変難しゅうござります。それらは写し物であります。本歌に迫る作品を作っています。京焼の瀬戸写し、唐物写し、或いは御本写しの共碗だとがいふことは、現物の方から押さえることはなかなか難しいことです。つまり、そういう本歌に紛れているものが附分あるのではないかといふ風に思つてみています。例えは、南禅寺に金地院というお寺がありますが、ここにある井戸茶碗、井戸型の茶碗等は、或いは京焼で作られたものがという風に我々は考えます。

そういう形で始まった京焼が、実は大きく展開をするのはやはり栗田口、或いは八坂と呼ばれる焼きものの生産地でした。瀬戸釉・鉄釉を掛けたものとか、錆絵で模様を描いたもの、或いは緑釉・紫釉といった低火度釉のもの、これを交趾焼と呼んでいますが、そういうものが作られていることもその記録の中でわかります。しかし、そういう京焼の様々な新しい動き、そういうものを一種の集大成した形で出てくるのが、仁清ということになります。仁清は、仁和寺の「L」と清石庵門の「清」の字をとつて落款印章にしています。このことは、彼の弟子・尾形乾山に与えた陶法伝書の中に書かれています。

京都の焼きものに関する状況は、ひとつはやはり栗田・仁清・乾山とい

う伝世の作品群があります。それからもうひとつは、他の窯場にはない、これはひとつ研究上の利点になるわけですが、色々な記録類があります。「隔年記」、神谷宗忍の「宗忍日記」等の茶会記の類、或いは乾山が残した陶法伝書「陶工必用」というものと「陶磁製法」の2冊があります。また、幕末の文政13年(1830)に書かれた、欽古堂毛祐の「陶磁指南」といったような記録があります。これらによつてかなり歴史的な展開の諸相を追いかけて、それらと伝世している作品とを合せて考えることができます。しかし、京都の窯が、京都という都市構成の中で生れ育ってきたために、他の窯場では窯跡の発掘によってそれを色々な形で跡付けるという一種の科学的な手法でそれを裏付けることができますが、残念ながら京都では沢山の家が建つておつたりして、窯跡からの発掘調査による跡付けは、大変やりにくいという部分も持つてあります。

そんな形で、まず東山で起こつた焼きものが、仁清によって集大成され、乾山に受け継がれ、ひとつの大きな京都の焼きものの特色として世の中に印象づけられています。これらはいずれも、いわゆる陶磁器の中の陶器にあたります。まだ、この期には磁器の焼成は始まっていないようです。

一方、有田あたりでは慶長の頃から磁器が焼成されはじめたということになつてあります。鳳林和尚の「隔年記」などによって寛永の17・18年(1640、1641)頃から盛んに、伊万里磁器が入つてくる様子がわかれます。しかし、まだ京都では、磁器を焼く程の力量を持たず、それは18世紀の後半まで待たなければなりません。これは、乾山の活躍が終焉を迎え、その後、この世界に出てまいります奥田頬川、それからその弟子筋にあたります吉本木米、高橋道八、或いはその弟の尾形周平、木米の兄弟弟子の欽古堂毛祐、或いはちょっと別系統になりますが、保全・和全、これもちょっと別系統になりますが、頬川よりは一步早く京焼の中に頭を出してまいります清水六兵衛といったような人達が活躍してまいりまして、ここに至つて初めて磁器焼成と陶器の焼成というものが併存して京焼を形成してくるという形になりますかと思ひます。(このあと、スライドを使って、個々の作品を通じて詳細な解説がなされました)

(文責: 友の会事務局)

## プロフィール

### 河原正彦氏

1935年生れ。同志社大学大学院卒。  
現在、京都国立博物館学芸課工芸室長。  
著書は、「古清水」、「京焼」等。

